

## 新刊紹介

Anders Nygren (ed.),

### *This is the Church,*

Translated by Carl C. Rasmussen,

Muhlenberg Press, 1952.

この書はスウェーデンの神学者 Anders Nygren 及び G. Aulén, R. Bring, A. Fridrichsen, H. Lindroth の著述を集めて編輯されたもので、十四人のメーテル派の神学者達の教會論に関する論文がのめられたものである。

内容は三つの部分に分けられ、第一部は「新約聖書に於ける教會」であり、A. Nygren; Corpus Christi; A. Fridrichsen, Messiah and the Church, A. Fridrichsen.; The New Testament Congregation; H. Odeberg.; The Individualism of Today and the Conception of the Church in the N. T.; E. Sjöberg.; The Church and the Cultus in the N. T.; O. Linton, Church and Office in the N. T.; G. Lindeskog, The Kingdom of God and the Church in the N. T.; N. Johansson, Who belong to the Early Christian Church? など、第二部は「歴史に於ける教會」であり、H. Lindroth, The Dogma concerning the Church; E. Malmström, The Permanent

and the Changing in the Church, (この他に有名な神学者スウェーデン教會の問題について述べられているために省略している)更に第三部は「基督敎敎理に於ける教會論」であり、R. Bring: The Subjective and Objective in the Conception of the Church; H. Olsson: The Church's Visibility and the Invisibility according to Luther; R. Josefson; The Church and Baptism; R. Josefson: The Lutheran View of the Lord's Supper; R. Josefson: The Ministry as an Office in the Church; G. Wingren: The Church and Christian Vocation, A. Nygren: The State and the Church; G. Aulén: The Church and Social Justice; G. Aulén, Lutheranism and the Unity of the Church の諸論文がのめられており、あらゆる分野にわたって教會が考察し吟味されている。諸家の中 Nygren や Aulén の外は吾々にはあまり知られていない人々ばかりであるが、それだけにこの地の神學者達を理解する上で貴重な文献になるであろう。メーテル派は先ずメーテル派の教會に属しているから、これらの人々の立場はこれに立っている。しかしその事は必ずしも所謂十六・七世紀の古代プロテスタントの正統主義を固執するのではなく、ルッテル派自身もその時代的限界をなごもつて、今日に於けるメーテル教會の立場と指針を明かにしようとしてくる(特に Aulén の二つの論文がこれに注目される)。又第一部の諸論文に於ては今日の新約神學の新しい傾向、即ち歴史的・批評的吟味をめぐってその限界をなごめ

聖書全體を基調づけているものからテキストを解釋しようとする傾向が顯著である。以下興味ある論文を二・三紹介しておく。

先ず本書の序論とも云われるべき Nygren の「Corpus Christi (キリストの體)」であるが、彼によれば新約聖書に於ける教會は畢竟この語によつて端的に云いあらわされるものとする。興味あるのはこの語の解釋である。この語によつて In the fact that Christ exists, the church exists as his body という眞理が、

即ちキリストは單獨でいますのでなくその體の首としてあり、その體こそが教會であるという、キリストと教會との不可避な關係が示されている(1)。したがつてこの事柄は基督信仰の本質的問題にかかわる。ここでアダム・キリストの證言 (Rom. 5:1-11; 1 Cor. 15) が考えられるべきである。人類はアダムを首とする事によつて罪に生きてが、今やキリストに於て (ex Nativitate) 新しい生命の道が開かれキリストを首とするものは義に生き且甦りへの希望が與えられている。(Rom. 1:7, 1 Cor. 15:1-23) キリストの體の觀念は神秘的に考えられないでむしろ終末的に理解されるべきである(2)。キリストの體にある肢に屬するためのバプテスマもキリストの體という觀念から基督論的に考えられるべきである (Rom. 6:3-5, 1 Cor 12:13)。アダムに屬する罪の體に死に、キリストに屬する生命の體に、生きるのである。福音は一つの理念の宣言でなくそのような事をなさしめる神の能力である。主の晩餐 (1 Cor 11:23-26) や教會の日常生活 (Rom 12) にもキリストの

體の觀念が適用されている(3)。言は肉體となつた。かくして教會は彼の體を持ち得る。それは未だ弱さと苦しみを持つがキリストに屬する限りに於て榮光の體へと變えられてゆく終末的希望を以て生ある (Col 3:1)。以上がキリストの體たる教會のメッセージである(4)。

Nygren はキリストの體として云いあらわされた教會を新約聖書 (パウロ書簡) のかたるところに忠實にききながら理解しようとするときに、ギリシヤの調和觀念や神秘主義的立場を排して、基督論的終末論的基調に於てこれをみざるを得なかつた。この事は注意を要する事柄である。ただ不審なのは、パウロがキリストの體として云いあらわしたものがすべて教會に適用されるかどうか、それ程キリストの體の觀念が新約聖書全體 (パウロ書簡だけでなく) の教會觀の性格を基調づけるものであろうかという點であらう。

次に A. Fridrichsen の「メシヤと教會」であるが、ここではイースターとペンテコステの後に成立した教會が福音書 (主として共觀福音書) の主イエスと如何なる關係にあるかを論じたものである。歴史的イエスが教會を直接的には意圖したまわなかつたという従來の歴史の見解をすてて、Fridrichsen はむしろ積極的に兩者の關係を結びつけ、この事をイエスのメシヤ意識と神の國の宣教の問題から究明しようとする(5)。即ちイエスの十二人の命と派遣の中に神の國の擔い手としての主イエスがあり、それを圍む十二人も普通のラビを圍む弟子達とはちがつた性格が與え

られていた事、ペテロへの言(Mt. 16:9)はイエスの神殿崩壊の預言(Mk. 14:9, Joh. 2:19)との關係より新しい神の宮たる教會の磐石として考えられていた事、受難の預言はすべての人々(したがつてイエスの死後の人々もふくめて)の體いにかかわる限りに於てそれは教會の業を豫想している事、パンの奇蹟や主の晩餐の中に立ちたまうイエスは教會の存在とその倫理の基礎づけをなしている事が考えられる(II)。かくして傳統的なメシヤの姿でなくイエスが直接これを宣言したもうたと否にかかわらず、新しいメシヤとして、イエスはみられるべきでそこに教會は豫想されている。又神の國の宣教についてもその到来の宣言はその中に主イエス自身がその宣言の秘義の擔い手として究極的には考えられるわけで、最早預言者でなくメシヤとしての宣言である以上それを圍む群は正にキリストの教會に他ならない(III)。かくしてイエスは當時の民族的メシヤ主義的行動に走る事なく、又默示的空想に陥らず、教會を立てる事によつて正に神の國をつくりたまうた(IV)。かくしてイースターとペンテコステの後に成立した教會とそれ以前の弟子達の群とは文字通り主イエスによつて結ばれ一つとなつて(Ⅴ)。

かような Fridtjofsen の考察の中に今日の新約學界の傾向を明かにくみとる事が出来よう。しかしこの事は必ずしも嘗つて究明しようとしてされなかつた歴史的イエスの問題を無視してしまふ事ではない。小さい論文であるから充分な事がしるされなかつた事は當然であるが、ブルトマンやデイベリウスに親しんで來

## 新刊紹介

た者の脈からみれば何か片手落ちのような氣がしてならない。

教會史の立場から興味あるもの一つに H. Lindroth の「教會に關する教義」があつた。彼はハルナツクのように初代基督教とドグマの發展を區別してしまふのではなく、ドグマが basic statements and principles that stand with the authoritative force for the Christian view of the faith として廣く意味で考へるならば初代教會にもドグマはあつたとし先ず舊約から新約へと考察してゆく。又 M. Werner の Die Entstehung, das Christlichen Dogmas problemgeschichtlich dargestellt (1941) に於て初代カトリック教會のドグマが教會觀の成立と密接な關係にある事と云っているのに示唆されて、基督教會の思想の流れの中で教會の存在意味をとりあつかつてゐる。更にその基督思想を基調づけるものが終末論的なものであつたとして、これを原始教會に限定せず、エイレナイオスやルツテルにもこれが伺われるを明かにしている。エイレナイオスが特にとりあげられたのは、ルツテル迄の時代に於て彼程聖書的な立場をとつたものはないといふ E. Brunner の語にしたがつたと云つてゐる。

ともかく彼がエイレナイオスやイグナチオスの教會觀を考察してそこから舊新約を見直し、これに聽こうとするゆき方は舊新約の教會觀の深くして廣く意味を充分味わしめる事になる。しかし彼が基督思想全般を終末論的(勿論廣義であるが)にみようとするのはいささか冒險すぎるように思われる。

最後に Nygren の「國家と教會」という論文を紹介しておこ

う。これはルツテルの國家觀を紹介しつつ今日の問題に答えようとしたものである。ルツテルの國家觀をみようとするとき、嚴密には「Lutheran doctrine of the state」は存しない。これはルツテルの國家認識というものが吾々の時代とちがつていた事、又彼にとつて神が何を意圖したまうかという事が最大關心で、吾々と國家との關係は直接問題とされていない事にもとづく。

ルツテルによれば二つの國、即ち神の國とこの世の國を神はつくりたまうた。この世の國をつくりたまうたのは悪しき者達の暴逆の故「惡魔に對して」である。しかしこの世の國も又神の國と同様神がすべおさめたまうところのものである。したがつて神の國に屬する人々を特殊な「宗教的」民とするカトリック的見解は斥けられる。神が二つの國を統治したまう仕方は、神の國では福音、言を以て、この世の國では律法、劍或は權力を以てである。この手段はとりかえられたり、混同されてはならない。福音によつて地上の權力を掌握しようとしたカトリック教會も又山上の聖訓を以て社會を秩序づけようとする空想家も正しくない。この世の國にある邪惡のためには劍が用いられねばならぬ。しかしこの事は世俗主義をみとめ、この世の國の自律をみとめ、基督者はこれには關與しない事を意味するのではない。如何に基督教的にこの手段が用いられるべきかが問題で、その方法を教えるのが神に屬するものの責任である。なんとすれば基督者は神の國に屬すると共にこの世の國に屬しているからである。以上にのべたルツテルの國家觀は新約聖書、就中パウロ書簡(Rom 5, 13)にもとずい

ている。

Nyren がルツテルを如何に正確にとらえているかは、ルツテルを専門に研究したものの批判に俟たう。おそらくここでルツテル派の國家觀があらわされているにちがいない。ここで問題になるのは、國家權力或は劍の理解である。果してかような見解がロマ書十三章と黙示録十三章が正しくよまれた結論であらうか。これを以て今日の「權力」に對する正しい吟味が出来るであらうか。「權力」の基督敎的使用とは何か。自らのためでなく神に仕えるために愛によつて用いるのだという Nyren の見解はある生ぬるさがないだろうか。等の不審は残る。又山上の聖訓を福音としてのみ理解しようとする立場も C. H. Dodd, Gospel and Law 1951, の立場からすれば大いに問題はある。

(土肥)

C. H. Dodd,

*Gospel and Law,*

*The Relation of Faith and Ethics in Early*

*Christianity.*

New York: Columbia University Press,

1951, pp. 83.

本書は新約學者として幾つかの名著によつて名高いドッドが一九四九—五〇年招かれて米國のユニオン神學校の客員教授で